

北穂高岳東稜

2013年8月16日

L 横溝岳彦、弘志、柊島健治、
藤本佐和



久しぶりにゴジラの背へ

北穂高岳東稜は「ゴジラの背」とも呼ばれ、涸沢から北穂を見上げた時に目を惹く岩稜ルートである。学生時代から何度も通ったルートであったが、昨年2012年の夏に久しぶりに登った。単独行動であり登攀用具を持っていなかったため、核心部は巻いたが、久しぶりに味わう高度感に高揚した。そこで、2年ぶりに涸沢に入る次男弘志(高一)と、研究仲間である京都大学の梶島健治先生、九州大学時代の教え子の藤本佐和さんと共に、正面突破することにした。天気は快晴、朝食後の6:30に涸沢診療所を出発し、まずは一般ルートである北穂高岳南陵を登る。

コースタイム

診療所 6:30-7:30 南陵鎖場 7:45-8:40 南陵のコル 9:00-9:30 核心部 9:40 -3pitch-10:30 懸垂終了点 10:40-11:20 北穂高岳山頂





久しぶりのゴジラの背へ

高山植物を愛でつつ、雄大な北尾根と吊り尾根を背景にピッチを上げる。途中、野イチゴを発見し、試食。なかなかワイルドな味だったようだ。



アプローチ

およそ一時間で南陵の鎖場に到着。ハーネスを装着し、ヘルメットを被る。本来であればもう少し下、登山道が岩が堆積したゴ一口を離れて左へ曲がる所から右上すべきであるが、今日は敢えて鎖場からのルートを取った。写真中の黄色いルートで東稜を目指す(上の写真は2012年のもの)。

写真左下は、雪渓から離れたルンゼ下部の踏み跡周辺。写真右下は、北穂沢をトラバースする弘志。





東稜のコルへ

昨年とは異なり、アプローチルンゼ内に雪は無かった。雪がないため、逆に、ガレ場を歩く時間が長く、落石を起こさないように気を遣う。東稜で一番気を付けなければならないのはこのアプローチだと思っている。雪やルンゼ内の状態は毎年変わるので、毎回、至適ルートを見つける必要がある。力のあるパーティであればどこでも登れるとも言えるが・・・今年は絶対に怪我をさせられないメンバーばかりなので、最も容易なルートを探した。昨年は直上したが、今年は上部で右のハイマツ帯に這い上がった(写真右下)。ルートファインディングは正解だったと思う。

東稜のコルからは雄大な北尾根が望まれる(写真上)。東稜から北尾根、そして滝谷へとステップアップしていった30年前が感慨深く思い出される。



ゴジラの尻尾-1

東稜のコルからしばらく(ゴジラの尻尾の部分)は、ロープが不要の岩稜歩きである。交互に出てくる岩場とハイマツを上手にクリアしていく。稜線沿いが基本だが、詰まったら横尾本谷側(右側)のルートを取れば大丈夫。写真左はご満悦の藤本佐和さん(九大医学部6年生)。

少し登ると、槍ヶ岳が美しい三角錐の勇姿を見せてくれる。

天候が悪いときは、東稜のコルから右下に向かえば、岩場を全てクリアできる巻道がある。





ゴジラの尻尾-2

稜線は次第に細くなり、左右共に切れ落ちたナイフリッジ上の岩稜歩きとなる。ルートは大体涸沢側で、足下は50m以上切れ落ちているが、岩は硬くフリクションも極めて良好なので、落ちる気がしない。ちなみに、ガスが出ると高度感が無くなるのでさらに容易になる(?)。

下の写真で藤本さんが立っている足場は幅30cm位あるが、その下は何もありません。



ゴジラの背中-1ピッチ目

基本的には歩けるが、落ちると命がない地点にさしかかったので、ロープを使うことにする。岩角でセルフビレーと確保支点をとる。中間ピンは2本、30m伸ばしたところのボルトで一旦切って固定ロープにする。みんな上手に中間ピンをクリアしてくる。

椋島先生はなぜか吠えながら歩いてきた。





ゴジラの背中-2ピッチ目

ここが核心部。狭い岩稜のクライムダウンと、横尾本谷川のトラバース。確保している側からはものすごい稜線に見えるが、歩いている本人にとってはさほどでは無く、終了して振り返ってから腰が抜けるようである。

スタンスは大きいが、高度感がハンパではありません。





ゴジラ退治終了

3ピッチ目は高さ25mの下降。上部に立派な確保支点があるので、これを利用して3名を確保しながらクライムダウンさせる。私は懸垂下降。これにてゴジラ退治、無事終了なり。

東稜核心部を北穂高側から俯瞰



北穂高岳へ

あとは登りやすいところを選んで北穂高山頂を目指す。藤本さんは曲がったことが嫌いらしく、直登でぐいぐい登っていった。他の三人は、弱点を突いてややキレット側を登り、キレットからの縦走路に合流して北穂小屋へ。

天候に恵まれ、素晴らしい山行となりました。診療所で留守番していただいた田口先生に感謝です。

